

### ⑤ 鎌倉 朝夷奈切通を歩く【資料】

集合場所・日時：30年5月23日(水) 09:30 金沢八景駅前 鳳月堂付近

行程：金沢八景駅→(バス 09:37 又は 09:41) 朝比奈バス停下車(約10分)→(徒歩) 朝比奈切通入口→熊野神社道分岐点(約10分)→熊野神社(約10分)→(分岐点へ戻る)→大切通(頂上)(約5分)→三郎の滝(約15分)→十二所バス停前→十二所神社→光触寺解散

(時刻はほぼ正午頃となる。あと鎌倉市内は自由行動とする。戻ると十二所バス停あり。

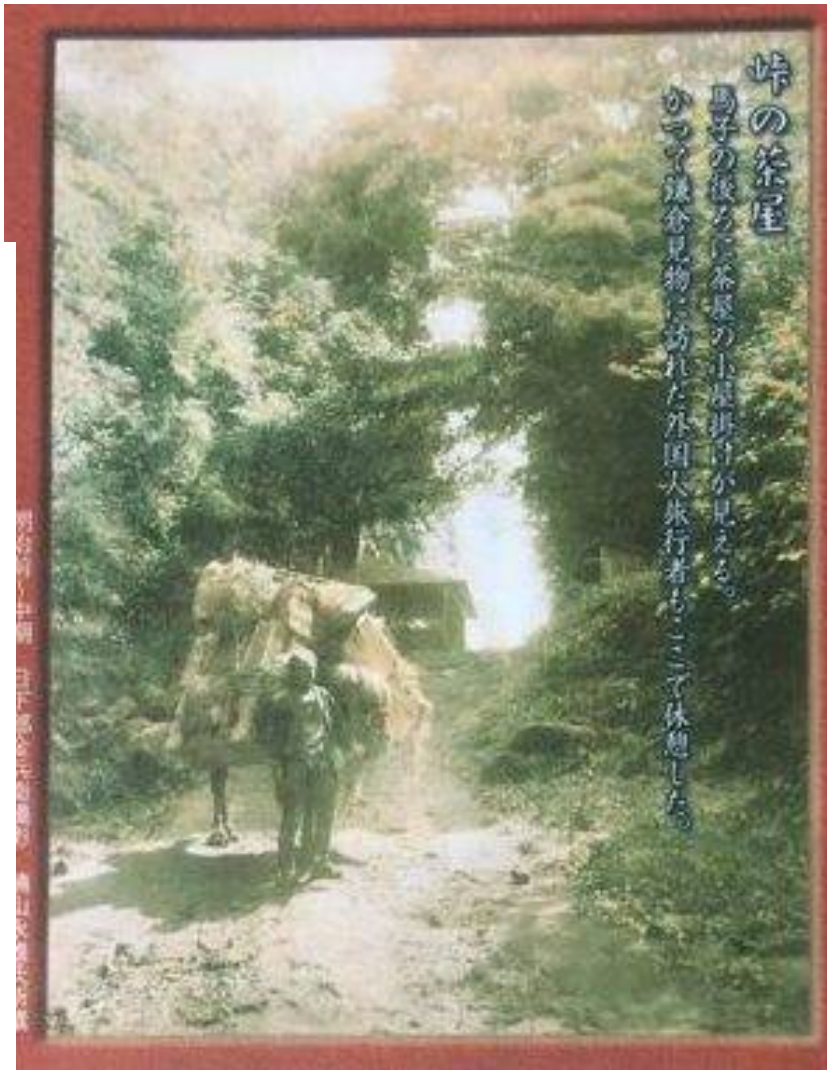
歩行区間は約2km, 2時間。足下が悪いため十分注意してください。光触寺まで途中トイレありません。



明治初期頃の重要な交通路として使用されていた朝夷奈切通

朝夷奈切通の由来  
三郎義秀が一夜にして切り開いたとの伝承があり、朝夷奈峠の名の起りとなっている  
鎌倉幕府の侍所初代別当和田義盛の三男で豪傑だった朝夷奈

明治初期～中期頃の写真 日下部金兵衛氏撮影  
楠山永雄氏所蔵  
編集・発行 横浜市教育委員会 資料より転載



峠の茶屋  
馬子の後ろに茶屋の小屋掛けが見える。  
かつて鎌倉見物に訪れた外国人旅行者もここで休息した。  
(左の写真上にある説明文を転載)

### ◆国指定史跡 朝夷奈切通◆

鎌倉幕府は、仁治元年[1240]六浦津との重要交通路として、路改修を議定、翌4月から工事にかかりました。執権北条泰時自ら監督し、自分の乗馬に石を運ばせて工事を急がせると「吾妻鏡」に伝えられています。当時の六浦は塩の産地であり、安芸・上総・下総等の東国地方をはじめ、海外(唐)からの物資集散の湊でした。舟で運ばれてきた各地の物資は、この切通を超えて鎌倉へ入り、六浦湊の政治的・経済的価値は倍増しました。また、鎌倉防衛上必要な防御拠点として、路の左右に平場(ひらば)や切岸(きりぎし)等さまざま人工的な仕掛が施されました。朝夷奈切通は、鎌倉幕府滅亡後も交通、交易の重要路線として維持され、度々の崩落や改修工事を経て現在に至り、七切通の中で最も往時の姿を残している切通です。

## ◆朝夷奈切通入口の案内板◆

・六浦から続いた舗装道路はここで終わり、朝夷奈切通入口には国指定史跡を記念する横浜国際観光協会・横浜市教育委員会文化財課と、横浜市教育委員会の案内板が2基設置されている。

### ◇国史跡 朝夷奈切通 (昭和44年6月5日指定)

鎌倉幕府は元年仁治元年(1240)六浦津との重要交通路として、路改修を議定、翌年四月から工事にかかりました。

執権北条泰時自ら監督し、自分の乗馬に土石を運ばせ工事を急がせたといひます。

当時の六浦は、塩の産地であり、安芸・上総・下総等の関東地方を始め、海外(唐)からの物資集散の港でした。舟で運ばれた各地の物資は、この切通を超えて鎌倉に入り六浦港の政治滝。経済的価値は倍増しました。

また、鎌倉防衛上必要な防御施設として、路の左右に平場や切岸の跡と見られるものが残されています。

鎌倉市境の南側には、熊野神社がありますが、これ

は鎌倉の良(鬼門)の守りとして祭られたと伝えられています。鎌倉七口の中、最も高く険阻な路です。 社団法人 横浜国際観光協会 横浜市教育委員会文化財課 平成2年3月



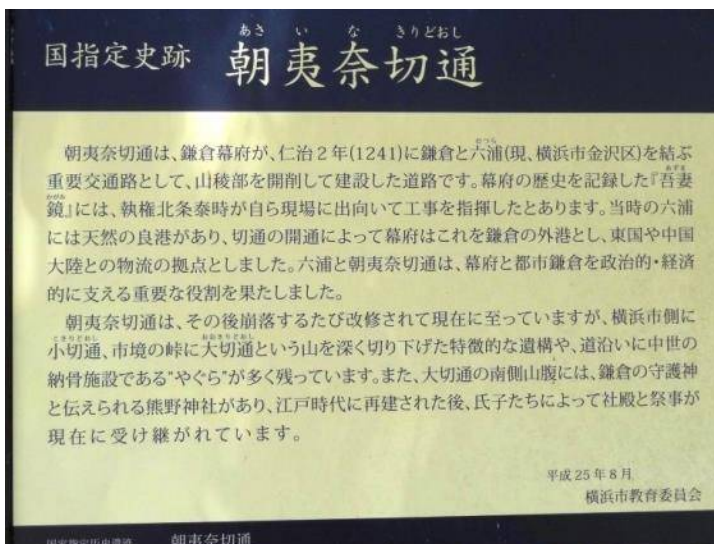
### ◇国指定史跡 朝夷奈切通 (あさいなきりどおし)

朝夷奈切通は、鎌倉幕府が、仁治2年(1241)に鎌倉と六浦(現、横浜市金沢区)を結ぶ重要交通路として、山稜部を開削して建設した道路です。幕府の歴史を記録した「吾妻鏡」には、執権北条泰時が自ら現場に向いて工事を指揮したとあります。当時の六浦には天然の良港があり、切通しの開通によって幕府はこれを鎌倉の外港とし、東国や大陸との物流の拠点としました。

六浦と朝夷奈切通は、幕府と都市鎌倉を政治的・経済的に支える重要な役割を果たしました。

朝夷奈切通は、その後崩落するたびに改修されて現在に至っていますが、横浜市側に小切通、市境の峠に大切通という山を深く切り下げた特徴的な遺溝や、路沿に中世の納骨施設である”やぐら”が多く残っています。また、大切通の南側山腹には、鎌倉の守護神と伝えられる熊野神社があり、江戸時代に再建された後、氏子たちによって社殿と祭事が現在に受け継がれています。

平成25年8月  
横浜市教育委員会

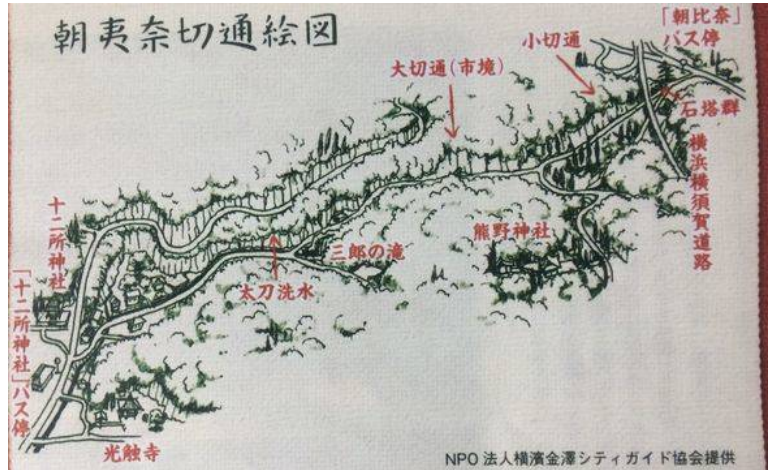




◆朝夷奈切通国指定史跡の経緯◆

昭和 44 年 (1969)鎌倉七切通の一つとして、鎌倉と外部の連絡状況を示す重要な史跡との理由で国史跡に指定され、平成 15 年 (2003)及び 19 年に鎌倉市側、また平成 20 年に熊野神社を含む横浜市側の周辺地域が追加指定されました。

右図：NPO法人 横浜金沢シティガイド協会提供  
横浜市教育委員会資料より転載一部文字記入



◆朝夷奈切通を歩く◆

◇石仏群・ここから切通へ



切通入口に「朝夷奈切通」の標柱が立っており、側面に「左熊野神社」と彫られています。左写真の前方右側に石仏群が見えます。これより先が史跡として国指定の朝夷奈切通となります。当時の六浦は塩の産地であり、安芸・上総・下総等の関東地方をはじめ、海外(唐)からの物資集散の拠点でした。舟で運ばれた各地の物資はこの切通を通過して鎌倉へ運び込まれ、六浦湊の政治的・経済的価値は倍増しました。鎌倉幕府滅亡後も六浦は海上交通の要衝として繁栄し、六浦や釜利谷の製塩はこの切通を通過して鎌倉へ運ばれました。

切通の入口には庚申塔や石地蔵が 8 基整然と建てられています。何れも風化が進み、建てられた年代など判然としないものがあります。鎌倉時代のものと思われる五輪塔のかけらがありますが、他の石仏は後世の作と思われます。

この前から国指定史跡区域となり、玉石一つ、草木 1 本さえ持出すことできません。

ここから鎌倉市側の「三郎の滝」までが「国指定史跡 朝夷奈切通」となります。



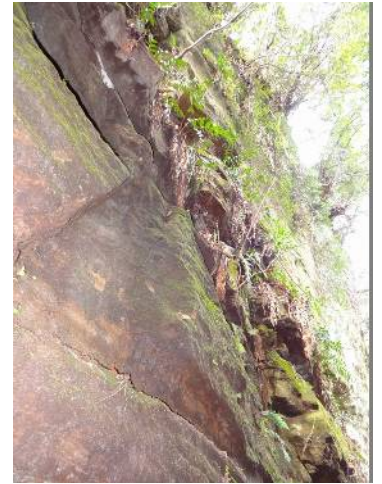


⑤朝夷奈切通を歩く

◇横浜横須賀道路の高架橋を潜る

朝夷奈切通は、昭和31年(1956)に切通を迂回する金沢鎌倉線の開通まで県道として利用されていましたが、その後の周囲の開発も切通路を破壊するまで至らなかったため、往時の姿を比較的良く留めています。

巨大な橋桁が切通を跨ぐ工事がなされていますが、細心の注意と、最新の技術をもって施工されたと見え、最小限の破壊で周囲には殆ど影響を及ぼしていません。



横横道路の高架をくぐったあたりの路端を見ると、水捌け用の側溝が地石を削り貫いて作ってある。このような丁寧な仕事するのはおそらく鎌倉時代の石工でしょう。

足元を見ると泥岩（シルト質凝灰岩）が並べてあります。これが鎌倉の遺構の一つ土丹（どたん）で、粘土質の泥岩を砕いて並べた鎌倉時代の舗装の跡です。アスファルト舗装に慣れた現代人にはなんとも歩きにくいと感じますが、当時としてはこの土丹のおかげで、ぬかるみが少なかったから、鎌倉では半月型の板を二つ割りにし、左右に並べて表面を藁で編み、輪状の鼻緒を付けた「いたこんかう（板金剛）」という板芯草履の出土が下駄よりも多いと「中世都市鎌倉遺跡が語る武士の都」（河野真知郎著）（講談社選書メチエ）にあります。



鎌倉の特徴である泥岩からなる路面は雨に脆く、いたるところ雨水に浸蝕され溝状になっています。横浜市側はこれが土嚢で補修されており、比較的歩き易くなっているが、鎌倉市側は何らの手当ての跡がなく、湧き水と雨水で路面の浸蝕が進んでおり、はなはだ歩き難しくなっています。

凝灰岩をほぼ垂直に切り落とした壁面には、「のみ」で削られた遺構が残っており、この切通が「のみ」と「鶴嘴（つるはし）」によって削り掘られたことが容易に想像されます。

また、壁面には横縞状に色の異なる地層が鮮明に表れている場所があり、いつ頃の地層でなぜこ



のような色の岩になるのか、余談ですが、「ぶらタモリ」の森田氏が見たら喜ぶことでしょう。

### ◇小切通 & 「やぐら」

小切通は、朝比奈切通の路が横浜市側の小さな尾根の突起部を乗り越えようとして造られた切通のようです。この小切通は約16mほど垂直に切り落とされ、切通の壁面の中ほどの高さに掘られた「やぐら」が見えます。調査報告書によると、元の切通の路面は「やぐら」と同じ高さの所を通っていたと推定され、当時の切通でも9mも切り落とされていたとしています。このことから、やぐらの下の残り7mは、後の時代に更に掘り下げられた部分と考えられます。



切通沿いには中世期、武家や僧侶等の納骨施設遺構である横穴式の「やぐら」が存在しています。小切通の壁面には「やぐら」へ続く階段状遺構が残り、改修過程で路面が次第に掘り下げられてきたことを物語っています。

切通が段階を置いて掘り下げが行われて行ったことは、ここ朝夷奈切通だけに限らず、鎌倉の切通というものが鎌倉時代から現在まで幾度も改修されていることが想像されます。

鎌倉は3方を急峻な山に囲まれ鎌倉城と言われた程の一種の城郭都市で、防備上は優れた都市でした。それだけに墓地とする土地が少なく、武士や僧侶、裕福な一部の町民は山中の崖面に「やぐら」と呼ばれる横穴を掘り墳墓としました。一方庶民には「やぐら」を造ることができず、由比ガ浜海岸に打ち捨てられたと伝えられます。近年、由比ガ浜の防潮堤工事の際、人骨が多数出土したのはその証であると言われます。



左右の写真は、小切通しの七米程の中段壁面にある「やぐら」。調査よれば、元の路面はこの高さであったという。





\*

### ◇熊野神社



大切通の南側約180mの山腹に位置しています。切通の開削に際し、源頼朝が鎌倉の鬼門に当たるこの地に、守護神として紀州の熊野三社大明神を勧請し、北条泰時が社殿を建立したと伝えられています。社は何度も立て替えられ、元禄8年(1695)にも当時の地頭加藤太郎左衛門により再建されたと言われます。その後も再三修築され、神社は氏子18戸によって社殿と祭事が維持され現在に至っています。

戦後、境内地から弘安9年(1286)銘の阿弥陀三尊種字板碑が発見されています。

朝夷奈切通の分岐点から南へ、杉林に囲まれた熊野神社参道は、平坦な平場となっています。当時は平場として防護施設を兼ねたのでした。石の鳥居の前はストーンと切り落としになっており、鎌倉時代の鎌倉城東城郭の守りの遺構がここにも残っています。



石の鳥居をくぐり、急な階段を上ると拝殿があり、更に上ると本殿があります。境内には横浜市指定名木古木の「イチョウ」と「スダジイ」の巨木があります。ここは全くの静寂の世界で、聞こえるのは風にそよぐ葉ずれの音と、時折聞こえる鳥の鳴き声だけです。



写真左：拝殿

写真上：本殿



## ◇大切通

熊野神社への道標がある所から、急な坂道になり岩がむき出しになっている路を上ると、やがて



大切通しになり、西が鎌倉市、東が横浜市となる市境になります。このあたりが切通の頂上で、山腹を垂直に切り下げた神秘的な様相を醸し出している、高さ18mの大切通と言われる所です。「新編相模国風土記稿」に「朝夷奈切通鎌倉七口の一なり、孔道大小二あり、十二所村境にある大切通という道幅四間許、大切通より一丁程を隔て東方村内にあるものを小切通と呼ぶ道幅二間許、共に鎌倉より六浦への往還に値れり」とあります。



18mの垂直に切落とされた大切通しの頂上周辺には、15m四方ほどの平場が存在し、近年行われたトレンチ調査では地表から20cm程の下で泥岩塊を敷き詰めた層が確認されています。泥岩塊層は0cm程の厚みがあり、この泥岩塊（土丹？）は切通し掘削に伴って発生した岩屑を利用して切通し真上に敷き詰め、平場を造成したものと推定されます。出土遺物がないために造成の時期は確認できていません。この平場には、外敵の来襲に備え、材木、岩石、糞尿その他戦略物資を備蓄した防壁上重要な施設でした。

平場は、熊野神社や、その参道周辺にも数ヶ所見つかっています。

大切通しの左側岸壁に六畳程の広間が削

られ、屋根用の梁孔らしき穴が見られます。広間の奥には、「賽の河原」と呼ばれている小石を積み上げ供え物をした地面があります。おそらく、切通しを通る人々の中で子供を亡くした旅人が、我が子の供養に小石を積み上げたのでしょう。



犀の河原

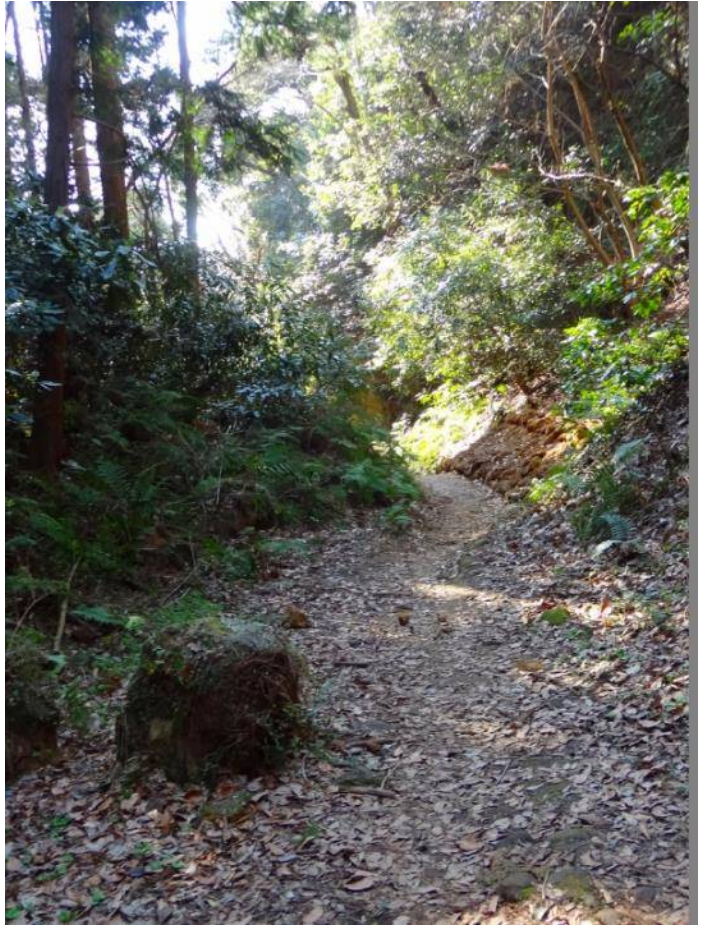
また、外側に近い壁面には、5～6歳の子供の背丈程の、彫み途中の釈迦如来像らしきものがありますが、いつの時代のものか不明です。この仏像の彫人は、峠の外敵や災厄からの守りと、行き交う旅人の無事を見守るために彫ったものでしょう。仏像の周りの壁面には、「のみ」か「つるはし」で削ったと見える横水平に近い荒削りの遺構が見られます。



大切通しを少し進んだ所に、人為的に置かれたと思われる大きな岩が両側にあります。この相対する二つの岩は、両岩に挟まれるように逆茂木があって、ここを通る通行人を監視する関所のよなものであったという説があります。ここ朝夷奈切通に限らず、鎌倉七切通には良く観察すると不思議な地形が見られますが、それが何であったかは推測の域を出ません。



大切通の少し手前に立つ横浜市側の標柱。  
向こう側（西側）鎌倉市、鎌倉市の標柱はない



#### ◇坂道改修や道普請を物語る石地藏



大切通の峠を越えて下り坂になると、両側にわき水処理のための溝が掘られているが、落ち葉で埋まり、水は中央に溢れ出してクチャぐちゃのところがあります。朝夷奈切通には、石仏や庚申塔、路供養塔などが多く見受けられ、特に坂道の途中に多く見受けられます。

「新編相模国風土記稿」に、「浄誉尚人という道心者が坂道を修造したことで、往還を通る諸人は難儀をまぬかれた。その和尚が亡くなったとき(延宝三年十月十五日)、この地藏に年月を刻んでだ、と「新編鎌倉誌」に書かれているが、今は文字剥落して読めない」この風土記稿にあるのが写真の石造だということですが、真意のほどは解りません。



⑤朝夷奈切通を歩く

「新編鎌倉誌」「新編相模国風土記稿」にある「浄誉尚人という道心者が坂道を修造した」との説は、朝夷奈切通は延宝年間（1673～1681）前に大掛かりな工事が行われていて、それ以降の姿とも考えられます。



南無阿弥陀仏と書かれた供養塔、安永九子天（1780）十二月吉日、峠坂普請、世話人・人足・志主・各道中などの文字が読めます。

右の南無阿弥陀仏の供養塔の隣には左の道造供養塔もり文化九壬申（1812）とあります。



これらの供養塔は、江戸時代に度重なる工事があったことをうかがわせ又この路が江戸時代にも、盛んに利用されていたことがわかります。



石地蔵を過ぎて、少し坂が穏やかになったあたりに右壁に小さな穴があります。かつて茶屋が小屋掛けしていた柱（梁）の後と思われます。この茶屋はほんの少し前の大正時代までであったそうです。

ここで一般的な鎌倉時代の路、いわゆる鎌倉古道について少し述べておきます。鎌倉時代の路は、真っすぐな道が多い。そしてT字路の交差

点に造り、Y字の交差点はない。Y字だとYに合流する先へ向かう馬同士が衝突する恐れがある。T字路に造れば突き当たる前に馬が自然に止まるからである。また、鎌倉時代には十字路もない、十字路になるところは、必ず一方をずらして造られていた。峰路或いは麓の道の場合は、5尺（およそ1m）の掘り割りの路であった。右の写真は切通にもかかわらず、真っすぐな路が穿かれています。



また、道幅は後世になって六浦と鎌倉間を、牛車等を使って物資を運搬するようになった為に多少拡張された路であると想定されます。



### ◇三郎の滝

湧き水と階段状の泥岩、雨水で浸食された路面のはなはだ歩きにくい区間を過ぎると、路はやや平坦になり、十二所へ向かう路と、朝比奈梅園へ向かう道が分岐する所の左側に小さな滝が流れ落ちています。狭い滝壺もあります。この滝が三郎の滝です。

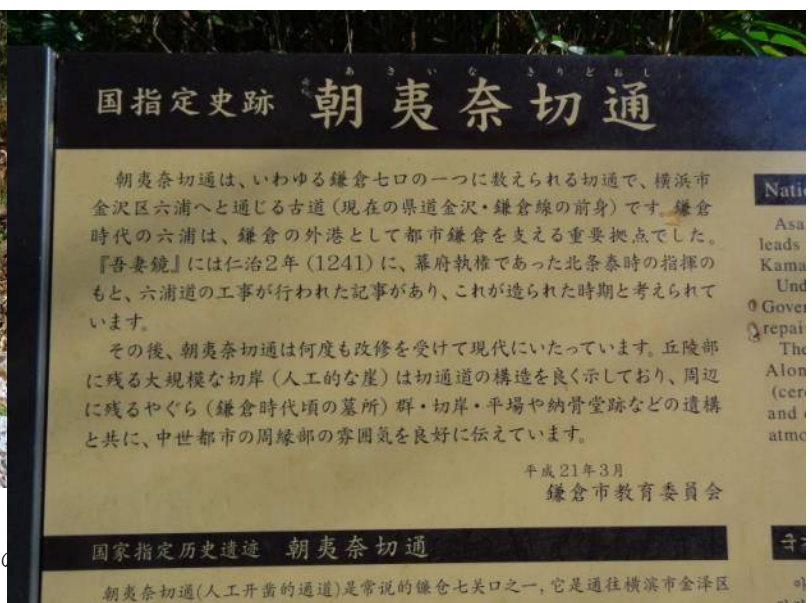


源頼朝の御家人（家来）和田義盛の三男で、巴御前を母に持つという朝夷奈三郎義秀が太刀で一夜にして切り開いた道であるという伝説にちなんで付けられた滝名といわれています。

昭和16年鎌倉市青年団建立の朝夷奈切通説明碑

また、切通しの名前の由来については、安房国朝夷群の人夫をもって切り開いたことから朝夷奈切通というとの説もあります。真意の程は分かりません。

ここまでが国指定史跡・朝夷奈切通として指定された区域で、鎌倉七切通しの中でも、かつての切通し路の姿が一番長い距離残っている所です。このあたりから茶屋跡までの切通の北側崖上には3段の平場が確認されており、3段目が路と同じ高さになっていて、茶屋跡はその平場にありますが。これら平場の北側崖面には「やぐら」の存在も確かめられています。



写真上：朝夷奈切通と十二所果樹園の案内  
写真右：鎌倉市教育委員会 平成21年3月設置の朝夷奈切通案内板 日本語・英語・中国語・ハンゲル後の4ヶ国語で記載されている



## ◇太刀洗水

三郎の滝から少し進むと、川の向こう側の崖面に表示板があります。夏草が伸びていて見え難く通り過ぎてしまいそうです。



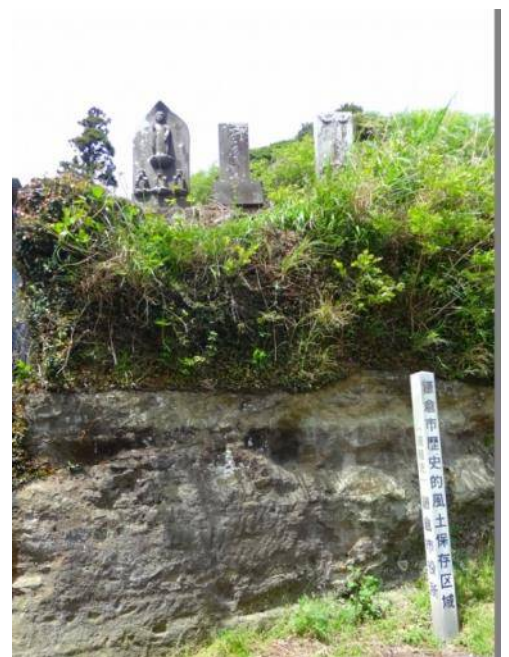
数年前までは、水の湧出場所が見えていたのですが、今日では雑草に覆われ全く見えません。太刀洗水の名前の謂れは、御家人梶原景時が上総介平広常を広常の屋敷で闇討ち、その時切った血刀をこの滝の水で洗ったという伝説から付けられた名前です。この滝水は鎌倉五名水の一つとなっています。

左写真：断層はかくやと思わせる小規模陥没の痕跡。色の違う地層のずれ落ちがはっきりと見える珍しい場所。太刀洗水から少し十仁所寄りの左側崖面に見える。

## ◇切通し庚申塚

太刀洗川と吉沢川が合流し滑川となった少し下流に小高い城壁のような土塁の上に庚申塔や馬頭観音の石仏が5基見えます。1基は崩れた五輪塔で下からは見えません。

この塚状のものは幅と高さが4m程あり、墨壁状遺構の残存と考えられます。この丘は元々西側の尾根と繋がっており、ここは六浦側と鎌倉側の境とされていたようです。現在は尾根を断ち切って新道（県道鎌倉金沢線）を切通した為に孤立した丘になってしまいました。十二所神社から朝夷奈切通へ向かうこの一帯は、朝比奈砦跡として、鎌倉市歴史的風土保存区域に指定されています。





## ◇十二所神社

金沢街道へ出て信号を渡ると右前方に十二所神社（じゅうにそうじんじゃ）が見えます。神社は、石段を上った先に石造りの鳥居と木造の社殿が佇んでいます。創建は、弘安元年(1278)、元々は熊野十二所権現社として、光触寺境内に祀られていましたが、天保九年(1838)にこの地に移され神社として独立したとされます。



十二所神社への入口にある信号の根元に小さな地藏様が立っています。

弘化の頃に朝夷奈峠を超えてきた巡礼の娘が、ここまで来て農家の馬にはねられ川に落ちて亡くなりました。不憫に思った村人が、この娘の供養のため地藏菩薩を祀ったと言われる悲しい伝説があります。

## ◇光触寺

光触寺（こうそくじ）は、阿弥陀三尊像です。弘安二年（11279）に作阿上人が開山、開祖は一遍上人で、以来念仏の道場として続いている時宗の寺です。時宗の寺は鎌倉街道沿いにはおおくみられ、街道を媒介して地方へ広がったことが窺えます。



⑤朝夷奈切通を歩く

光触寺のご本尊「阿弥陀如来像」は「頬焼阿弥陀」として知られ、国の重要文化財に指定されています。(通常は非公開) 境内の地蔵堂には「塩嘗地蔵 (しおなめじぞう)」が祀られています。



昔、六浦から朝夷奈峠を越えて鎌倉へ塩売りに来た商人が、地蔵様に初穂として塩を供えたところ、帰路にはなくなっていた為、お地蔵様が「なめてしまわれた」という言い伝えから「塩嘗地蔵」と呼ばれるようになりました。



足利公方邸跡碑

光触寺 案内板掲載文を下記に転載

『時宗の開祖・一遍上人が開基(寺の創立者)と伝えま  
す。本尊の木造阿弥陀如来及び両脇侍立像「焼阿弥陀」  
(ほほやけあみだ)には、盗みの疑いをかけられた法師の罰の身代わりになり、頬に焼き印が残  
ったと言われる伝説があります。

本堂の前の「塩嘗地蔵」(しおなめじぞう)は、六浦(現・横浜市金沢区)の塩売りが朝比奈峠を  
越えて鎌倉に来るたびにお地蔵様に塩をお供えしたといい、いつも帰りには無くなっていたとこ  
ろからその名の由来があります。昔は金沢方面から塩が入ってきたことが分かります。』

鎌倉市

- 参考資料：・横浜市教育委員会ホームページ      ・鎌倉観光文化検定 公式テキストブック  
・歴散加藤塾 古道を歩く会 鎌倉古道下の道壺 鶴岡八幡宮から金沢八景まで  
・NPO法人 鎌倉ガイド協会ホームページ      ・鎌倉観光ポータルサイト 鎌倉ぶらぶら



